

小口幸伸著「外為市場血風録」集英社新書 2003年1月22日刊を読む

通貨危機を考える

1. 通貨危機は一般的に、倒産・失業・インフレなど社会の混乱に繋がることが多いが、一方で、制度や組織の変更を余儀なくし、社会の構造改革や人心の一新を促し、さらに新しいシステムの誕生の契機にもなり得る。
2. たとえば、アジア通貨危機では、政界と癒着した企業の経営者の排除や縁故主義の見直し(インドネシア)、財政改革や、大胆な不良債権処理・金融機関の整理統合などの金融改革を断行(韓国)したりした結果、旧体制の一新や社会構造改革が進んだ。
3. 欧州は通貨危機を経て、新しいシステム = 統一通貨への希求がいつそう強まり、それに向かって各国は結束を強めた。米国はドル危機に見舞われながらも、資本市場の整備や資本の効率的利用を可能にするテクノロジーやシステムの開発を進めた。魅力ある市場を世界に提供することでドル離れが進まないように努め、国際的にも、各国の協調体制の確立と政策の迅速な実行を図るようになった。
4. その点では、不可避的に襲ってくる通貨危機も単なる悪夢ではない。

P236 ~ 327

[コメント]

現在の世界大不況は、多くの国で世界的な通貨危機寸前とも言える。この危機をバネにどのような経済改革ができるか。ありとあらゆる名目をつけてのバラまき一方の財政支出は、本当の未来に向けての改革になるのか。本書を読み直して考えることも大事だ。

- 2009年4月10日林明夫記 -